事例５　第３学年　内容項目：Ｃ　社会参画、公共の精神

・問題意識を高める導入	・多様な感じ方、考え方を対比して示す板書
・主人公の心情を掘り下げる問い返し	・多様な視点から考えを広げ、深める話合い
・思考を広げるためのツールを活用した小グループの話合い	・道徳的価値の自覚を深める話合い
・自分の考えを書く活動	

１　**主題名**　よりよい社会の実現

２　**ねらい**　清掃登山を行う人々の考えを深める話合いを通して、社会連帯の大切さに気付き、よりよい社会の実現に貢献しようとする実践意欲を育てる。

教材名　「次は清掃登山に挑戦だ」（出典：「彩の国の道徳（中学校）『自分をみつめて』」県教委）

３　**主題設定の理由**

⑴　ねらいや指導内容について

本時は、内容項目「社会参画の意義と社会連帯の自覚を高め、公共の精神をもってよりよい社会の実現に努めること。」に関するものである。これは、小学校第５学年及び第６学年の「働くことや社会に奉仕することの充実感を味わうとともに、その意義を理解し、公共のために役に立つことをすること。」を受けたものである。

学校生活においては、物事を人任せにしがちな生徒が見られる一方で、学校外においては、例えば身体の不自由な人をいたわろうとしたり、地域の清掃活動や行事、社会福祉施設のボランティア活動に参加したりと、よりよい社会を協力して築こうとする意欲をもった生徒も見られる。学年が上がるにつれて、人間関係が希薄化する傾向が見られ、他者に対する配慮を欠き、公の場で、自己中心的な言動をとってしまうことも少なくないが、本来、良くないと思う心が中学生の内面に十分あり、誰もが望むよりよい社会の実現については大人より純粋に考えることもできる。

指導に当たっては、まず学級活動や生徒会活動における体験を生かして、社会参画や社会連帯についての考えと自分も社会の一員であるという自覚を深めさせ、互いに協力し合おうとする意欲を育てる必要がある。さらに、よりよい社会を実現するためには、進んで社会に貢献しようとする態度を育てることが大切である。

⑵　これまでの学習状況及び生徒の実態について

多くの生徒は、体育祭や修学旅行などの学校行事において直面した課題を、周囲の協力を得ながら解決してきた。また、第２年年で行った職場体験活動では、社会における自分の役割を知り、将来の生き方についての関心を高めた。職場体験の同時期に行った彩の国の道徳教材「ぼくの職場体験活動」を活用した道徳の授業では、勤労の大切さに加え、社会貢献が自らの充実感につながることを学んだ。さらに、防災教育や福祉教育、国際理解教育などを通して、一人一人が共に手を携え、協力することで、よりよい社会を築いていけることを学んできた。しかし、個々の学習の過程において、社会貢献を具体的に実践するとなると、自分の自信のなさから諦めることを選んだり、実践する必要のなさを主張したりする姿が見られた。したがって、自分と他者の考えから色々な見方や考え方があることに気付き、自信をもってよりよい社会の実現に貢献しようとする実践意欲を育てていきたい。

⑶　教材の特質や活用方法について

本教材は、エベレストや富士山に捨てられたごみを目の当たりにした冒険家の野口健さんが、富士山の清掃登山活動に取り組んだ話である。社会連帯の大切さに気付き、よりよい社会の実現に貢献しようとする意欲を育てるために、主に次の場面を基に話し合うことにする。

①隊長がベースキャンプ周辺のごみ拾いを提案した場面

隊長の言葉を聞いた野口さんの思いを考えさせるとともに、他の隊員との考え方の違いを捉えさせる。

②ごみ拾いをすると覚悟を決めた場面

山のごみ問題と向き合う野口さんが、清掃登山活動を行うと決意したときの気持ちの変化を考えさせる。

③多くの人たちと清掃登山活動に取り組む場面

ごみ拾いに参加した人たちの偉大な力に気付かされた野口さんが考える「したいこと」と「しなければならないこと」とは何かを捉えさせ、自分自身にも置き換えて考えさせる。

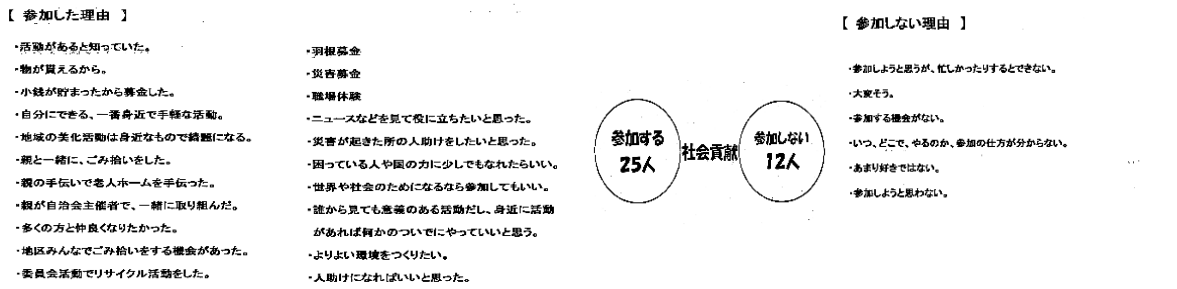
以上の理由から、本主題を設定した。

4　学習指導過程

段階	学習活動と主な発問	予想される生徒の反応	・指導上の留意点　☆評価の視点
導入	1　「社会貢献」に関するアンケート結果を確認する。 ・社会貢献活動に参加するか参加しないかのアンケート結果を見てどのように思いますか。	・募金やごみ拾いの参加が多い。 ・色々な社会貢献がある。 ・参加しないには、やりたくない人だけではなく、迷っている人もいる。	・アンケート結果は事前に教室に掲示して、生徒の関心を高める。 ・社会貢献活動に参加した人と参加しない人の考えを意見交換して、ねらいとする道徳的価値への方向付けをする。

問題意識を高める導入

T：社会貢献活動に参加すること、参加しないことのアンケート結果を見てどのように思いますか。
S：テレビやネットで情報を知って、自分からやってみようと思い参加しました。
S：親が活動していたから、手伝ってみました。
S：災害を見て可哀想だと思ったので、相手のために自分ができることを考えて参加しました。
S：私は、参加しようと思わないです。
S：参加したいとは思うけれど、きっかけがありません。
T：では、きっかけがあったらどうですか。発表にもあったように、他の人の誘い、興味のある内容、情報などがあったらどうでしょうか。
S：誰かと一緒にやるのなら、始められるかもしれません。
S：興味はあるけれど、行動には移せないです。
S：(返答がない)
T：今日は、社会参画に必要なことは何か、みんなで話し合って考えていきましょう。



展開	2　教材「次は清掃登山に挑戦だ」を読み、話し合う。 ⑴なぜ、野口さんはごみを拾いたくなかったのだろう。	・拾いたくないというより肋骨を骨折していて自分のことで精一杯だったから。 ・登頂するまで体調を整えて過ごすことを優先して、他のことなど気にしていられなかったから。 ・どうせ拾っても同じような状態に戻るからわざわ	・登場人物や条件・情況を整理する。 ・清掃活動が大切だと分かっていても、それをなかなか実行に移すことができない野口さんに共感させる。 ・他の登山隊との考えの違いは何かを考えさせる。 ・板書は、野口さんと登山隊の考え方の違いが分かるように対比で示す。

		ざ拾いたくない。 ・山登りが目的なのに、なぜごみを拾わなくちゃいけないのか疑問だから。	

多様な感じ方、考え方を対比して示す板書

Ｔ：なぜ、野口さんはごみを拾いたくなかったのだろう。
Ｓ：肋骨を折って、体が痛いし、休みたかったから。
Ｓ：他の隊のごみを拾いたくないから。
Ｓ：最高峰を目指していて、それが最優先だったから。
（中略）
Ｔ：野口さんと他の登山隊の考えの違いは何ですか。
Ｓ：国や文化の違いがあると思います。
Ｓ：やる気や意識の違いがあります。
Ｓ：価値観の違いだと思います。
Ｔ：どういうこと？詳しく教えて。
Ｓ：野口さんは自己中心的で、登山隊は周りのことを考えています。
Ｔ：みんなはどう思いますか。
Ｓ：野口さんは自分のため、登山隊は誰かのためを考えています。

⑵登山隊の言葉を聞いた野口さんはどう思ったのだろうか。	・否定されて言い返したくなった。 ・富士山の汚さを見て落ち込んだ。 ・誰かがやらないと何も変わらない。先ずは、自分が動こうと思った。	・ごみ問題と向き合い、自らこの状況を変えようと決断するまでの野口さんの気持ちを押さえる。 ・野口さんの悔いや登山家としての意地、願いなど様々な視点を捉えながら話し合わせる。

主人公の心情を掘り下げる問い返し

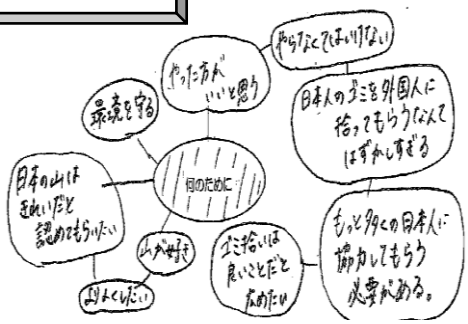
Ｔ：登山隊の言葉を聞いて、野口さんはどう思ったのでしょう。
Ｓ：言われて悔しい。
Ｔ：悔しいだけで、素直に登山隊の言葉を受け止めてないのではないですか。
Ｓ：言われたことに納得したと思うし、恥ずかしさがあったと思います。
Ｔ：どんなことが恥ずかしかったのですか。
Ｓ：自分は、富士山は綺麗だと思っていたけれど、周りはそう思っていなかったことに気付いたからです。

（補助発問） 6000 人以上の人たちはどういう思いで清掃活動に参加しているのかな。	・日本の宝である富士山を日本人が汚してしまった。だから今まで以上にきれいにしなければいけない。 ・きっかけを作ってくれた日本人がいるのなら、それについて行こう。	・6000 人以上の人が、清掃活動への強い意志をもち、互いに協力して社会貢献しようとしていることに気付かせる。 ・ワークシートのウェビングマップを用いて、多様な考えを広げ、深めさせる。

多様な視点から考えを広げ、深める話合い

Ｔ：6000 人以上の人は、どんな思いで清掃登山に参加しているのでしょうか。
〈個人や集団の視点〉
Ｓ：富士山をきれいにしよう。
Ｓ：活動する人数は多い方がいい。
Ｔ：何で、自分一人でやらないのでしょうか。
Ｓ：人を増やせば広範囲に清掃活動ができるから。
Ｓ：色々なアイディアが出てくるかもしれないから。
Ｓ：みんなで綺麗にしよう。
Ｓ：みんなで取り組めばよい活動と思ってもらえる。
〈自然という視点〉
Ｓ：山は元々あり、誰のものではない。
Ｓ：山にごみを捨てるのは良くない。
Ｓ：環境や自然について、もっと考えていこう。
〈誇りという視点〉
Ｓ：恥にならないように富士山のごみ拾いをする。
Ｓ：日本の富士山、登山家としての誇りがもてる。
Ｓ：富士山に人がまた来てもらえる。
Ｓ：綺麗になれば日本は一流と思ってもらえる。

思考を広げるためのツールを活用した小グループの話合い



・座席を班隊形にする。
・互いの距離を近くし、会話量を増やすことで考えを深めさせる。

自分や他人の考えを付け足すことで、多様な視点で話し合うことができる。

⑶「人間には『したいこと』と『しなければいけないこと』がある」とは何だろう。（中心発問）	・「したいこと」は自分のためになることで、山に登ること。 ・「しなければいけないこと」は他人のためになることで、山を清掃すること。	・野口さんや 6000 人以上の考えを踏まえ、「したいこと」「しなければならないこと」について気付いたことを班や全体で交流させる。 ・個人の考えを広げたり深めたりするための話合いなので、班で一つの意見をまとめたり、それを発表したりはしない。 ☆「したいこと」と「しなければならいこと」について、自分の考えと他の人の考えを比べながら

			多様に考えている。

道徳的価値の自覚を深める話合い

Ｔ：「人間には『したいこと』と『しなければならないこと』がある」とは何ですか。
〈個人で考える〉
Ｓ：したいことは、自分のためにすること。しなければならないことは、自分の欲求だけで行動しないで社会のためにすること。
Ｓ：したいことは、自分の望みを叶えることで、しなければならないことは、人や国、環境などのあるべき姿を保つためにすること。
Ｓ：綺麗な山にしたい。ごみのポイ捨てを無くして綺麗な環境を保つこと。
〈班での交流〉
Ｓ：・・・・・。
Ｓ：・・・・・。

※４人班：一人ずつ自分の考えを伝える。疑問は投げかける。
※（例）「私は〇〇〇と思うけど、どう？」

〈全体での交流〉
Ｔ：班で話し合ってみて、改めて、「人間には『したいこと』と『しなければならないこと』がある」とは何ですか。
Ｓ：したいことは、自分のためであり、しなければならないことは、相手や周りの人のためにすることだと思います。
Ｓ：しなければならないことは、周りのことまで考えて、自分だけいいとかではなく、人や環境、各国みんなが幸せな気持ちになれるようにすることだと思います。
Ｔ：誰かのためや幸せな気持ちになるためには、具体的にどうすればいいですか。
Ｓ：思いやりをもつこと、人として成長すること、真面目に生きることだと思います。
Ｓ：協力することや助け合うことだと思います。

《自分の考え》

全ての人が自分のしたいことだけやるのはよくない。「したいこと」は自分のためにやることで、「しなければならないこと」は自分のためだけじゃなくて誰かのためになること。やりたいことだけするのは×

《他人の考え》

「したいこと」
→自分のためにすること
自分の考えを優先

「しなければならないこと」
→他人のためにすること
助け合い

3　自己を見つめる ・これまで社会に参加したことはどんなことですか。これから社会に参加していくことで必要なことは何だと思いますか。	・毎年、地区の夏祭りの後片付けを手伝っている。自分にできることを進んでやることが大切だと思う。 ・自分のことだけではなく、人と助け合いながら、社会貢献活動に積極的に参加していきたい。	・これまでの自分を振り返り、これからの生き方についてワークシートに書かせる。 ☆社会参画に必要なことについて、自分と他の人との関わりから感じたり考えたりしている。	

自分の考えを書く活動

・～ は自己を見つめる部分。
・＝ は生き方についての考えを深める部分。

○ これまで社会に参加したことはどんなことですか。
これから社会に参加していくことで必要なことは何だと思いますか。

私は小1～6まで毎年、地域でおこなっているゴミ拾いのボランティアをしました。小学生だったこともあり、何のためにやるのかよく分かっていませんでした。その活動は朝8:30からだったので朝はやくおきて何でちがう人のゴミなんか拾わなければいけないのッ！と思っていました。まさに野口さんと同じ意見でした。しかし、この授業で、自分のためでなく、他の人の気持ちを考えて、みんながよい気持ちになるように、自分が行動することの大切さを学びました。今は台風なので被害をうけている人が多いと思うので、手助けをしたいです。

○ 自己評価

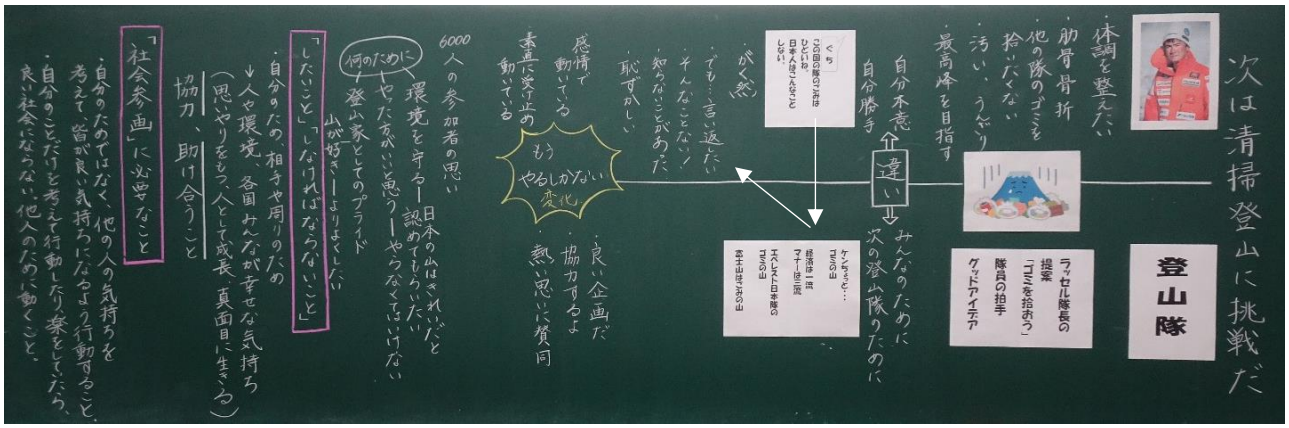
○ これまで社会に参加したことはどんなことですか。
これから社会に参加していくことで必要なことは何だと思いますか。

社会の役に立てるようなことを積極的に行っていくことが大切であるし、必要だと思いました。私は、今までにボランティアで地域のゴミ拾いや募金を行ったことがあります。そのおかげで地域の環境がきれいになったり、災害にあった人々の役に立てていると知ったときは、とてもうれしかったです。これからも、そのような活動を続けていきたいと思いました。

人間には、「したいこと」「したくないこと」がありますが、「したくないこと」でも、皆のために積極的にできるようになりたいと思います。

終末	4　教師の説話を聞く。 毎日、近所に住んでいる年配の女性が、スーパーの袋を持って学校の敷地内を掃除してくれているのをみんなは知っていますか。女性が帰る時、手にぶら下げたスーパーの袋の中には、ごみがたくさん入っていて、それをいつも持ち帰ってくれています。自分から進んで学校の敷地内を綺麗にしようとする思いや毎日続ける女性の行動力に、感心しています。		・学校の敷地を清掃活動する地域の女性を紹介する。 ・自ら進んで、よりよい社会を築いていこうとする意欲を高める。

本時の板書



５　他の教育活動との関連

学校行事	「体育祭」「文化祭」「修学旅行」等を通して、周りの人と協力することの大切さを学ぶ。
各教科等	防災教育や福祉教育、国際理解教育なども生徒が共に手を携え、協力することで、よりよい社会を築けることを学ぶ。
学校・地域・家庭との連携	地域行事やボランティア活動のお便りを通して、生徒が自主的に参加する協働活動から達成感を学ぶ。

６　評価の視点

【物事を多面的・多角的に考えている様子】

・他の人の考えと自分の考えとを比べながら、社会参画の意義について多様に考えている。

【道徳的価値についての理解を自分との関わりで深めている様子】

・社会参画に必要なことについて、自分や他人との関わりで考えている。

７　考察

⑴　道徳科の目標に示された学習活動

①多面的・多角的に考える学習について

自分本位な野口さんと周りのことを考える登山隊との違いについて話し合わせた。野口さんが、「もうやるしかなかないぞ」と覚悟を決めるまで、その悔しさや落ち込み、恥ずかしさ、やる気等の葛藤を乗り越えられた要因に気付かせることができた。

また、野口さんが集めた 6000 人以上の人が何のために清掃登山活動に参加したのかをウェビングマップを用いて話し合わせた。ある生徒の「清掃活動はやった方がいいと思う。」という意見について、他の生徒が「やらなくてはいけないと思っている人たちがいる。」と言い、さらに他の生徒が「日本人のゴミを外国人に拾ってもらうなんて恥ずかしすぎる。」と続けていった。「もっと多くの日本人に協力してもらう必要がある」、「ごみ拾いは良いことだと広めたい。」といった話合いの流れを、誰が見ても分かるように図で示した。ウェビングマップは、自分と友達の多様な考えを広げたり、深めたりするのに効果的であった。「自分や周りのため」、「自然のため」、「誇りのため」などの視点で話し合うことを通して、人間としての自己の生き方について生徒はさらに考えを深めることができた。

中心発問の「人間には『したいこと』と『しなければならないこと』がある…。」では、自分の考えをまとめ、班や全体で交流した。他の考えと自分の考えを比べながらねらいとする道徳的価値について考えを深めることができた。

②自分との関わりで考える学習について

6000 人以上の人の考えを踏まえて「したいこと」、「しなければならないこと」とは何か。また、これまで社会に参加したことはどんなことか、これからの社会に参加していくことで必要なことは何か、ワークシートを活用して考えさせた。これらによって、生徒は本時のねらいとする道徳的価値について考えを深めることができた。

⑵　視点☆に基づく本時の評価

【物事を多面的・多角的に考えている様子】
☆「したいこと」と「しなければならないこと」について、自分の考えと他の人の考えを比べながら多様に考えている。

自分の考えをワークシートにまとめ、班や全体で交流をした。「自分が出来ることを話している」、「自分や周りのことを考えて話している」、「自分や周りのことを考え、よりよいアイディアを話している」といった様子に着目して評価を行った。なかなか考えが浮かばない生徒には、他の人の話を聞いたり、参考にするようメモしたりするよう個別に支援をした。

【道徳的価値についての理解を自分との関わりで深めている様子】
☆社会参画に必要なことについて、自分と他の人との関わりから感じたり考えたりしている。

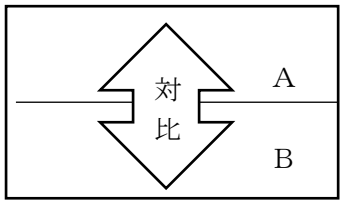
自分を見つめる場面で、ワークシートの記述を中心に評価を行った。「これまでの自分を振り返

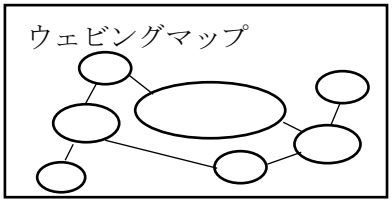
っている」、「主人公に自分を重ねている」、「自分と他の人との関わりから感じたり考えたりしている」などの記述に着目して評価を行った。

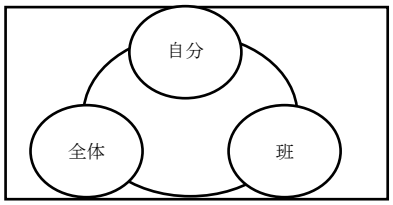
⑶　その他

事前アンケートを授業前に掲示して生徒の関心を高めた。授業の導入では、アンケート結果の報告で終わらせるのではなく、授業のねらいとする道徳的価値への方向付けをするために、社会参画する人としない人の意見交換を行った。特に、参加しないとした生徒が意見を交換する中で、参加する側の参加するに至った理由などを知ることで、授業のねらいである「社会参画に必要なこと」を考えていけるようにした。

また、板書やワークシートは、進め方や内容を分かりやすくするために対比や図にして示した。







多面的・多角的に考える場面では、話合いの経過が見て分かるように「ウェビングマップ」を用いた。生徒だけでなく教師にとっても話合いの様子が捉えやすくなり、補助発問を行う上でも有効であった。

発問時には、生徒の発言に対する問い返しや揺さぶりを意識して行うことで、生徒の本音を引き出せるようにした。